



第4章

KWM-2のメンテナンス

メンテナンスは、機構部分と電気回路部分に二分してレストアします。特に前者については、コリンズのマニュアルにも記載されていない事項です。また、電気回路については20数年余にわたる生産期間にはずいぶんと改良も加えられました。手元のセットがどの年代のものか現品を眺めて確認しながらの作業が必要です。

本章では、KWM-2を生産当時の元気なセットによりみがえらせる正しい手入れの方法について紹介します。

高圧危険！ メンテナンスの心構え

現代の半導体で構成されたトランシーバとは異なり、KWM-2のファイナル・チューブである“6146”のプレート回路には+800V(写真4-1)、そのほかの真空管のプレートやスクリーン・グリッドには+270Vが、また送受信のコントロールなどには-100V、さらにはAC100Vが電源スイッチ周りには走っています。

込み入ったセット内の随所に、けがや場合によっては死に至る危険性が包含されています。これは決して誇張ではありません。ファイナル・ケージやシャーシ内部の点検には、電源プラグがACラインから抜けていることを十二分に確認して点検を行うようにします。

楽しいはずの手入れが、取り返しのつかないことにならないように十分な注意が必要です。

メンテナンスは、機構部分と電気回路部分とに分けて行います。外観も性能の重要な要素であり、また、



写真4-1 受信時にも+800Vは加えられている。カバーを外すとセーフティ・スイッチが作動して電源はOFFになる。しかし、セットによってはこのスイッチのないものもあるので要注意・危険！

機構部分がスムーズな動きをしてくれないことには楽しい操作ができないし、せっかく手に入れたセットが持つ機能を十分に発揮することはできません。ましてやダイヤルの操作が不具合ではもう致命的です。

見
本

機構部分のメンテナンス

必要なツール

手入れには、事前の準備が必要なのはなにごとも同じです。また、作業の仕上がり具合は使用する道具で決まるといっても過言ではありません。

ここではKWM-2をレストアするために必要不可欠なツールと、あれば重宝するものを紹介します。

① レンチ・セット

KWM-2には、随所に特殊なネジが使用されています。バンド・スイッチのメカとシャフトの連結部分、

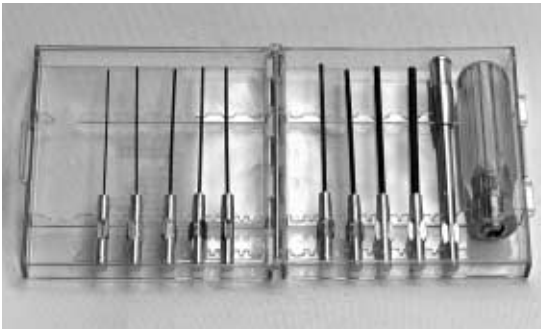


写真4-2 KWM-2のメンテナンスには必須の工具でクーバー・ツール社のXceliteシリーズ99-PS60 全11本組

ダイヤルとPTO連結部分、あるいはメイン・チューニング・ノブです。一方、KWM-2Aでは、バンド・スイッチとその上部にあるバー・ノブなどに使用されているネジです。

これらのネジは見慣れた六角レンチで操作できるものとは違います。これらを無理やり六角レンチで回すとネジの頭が変形してしまい、正しいレンチでも取り外しも締め付けもできなくなってしまう。そうならないで、場合によっては大手術が必要です。

写真4-2に示すセットは、COOPER TOOLS社のXceliteシリーズ MODEL: 99-PS60のブリストル・スプライン・コンパクト・レンチのセットで1本のグリップ、1本の延長シャフト、および着脱可能な9種類の形状とサイズの異なるブレードが含まれています。この延長シャフトは、ダイヤル・メカの調整にはとても重宝します。

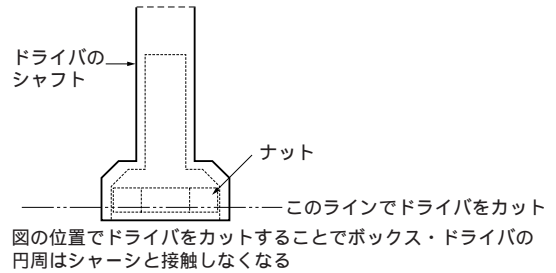


図4-1 ボックス・ドライバの加工

② ボックス・ドライバ

バンド・スイッチ部分のシールド・ボックスを留めているナットは、シャーシ上部のスラグ・ラック下に並んでいます。使用されているナットのサイズは生産時期により2種類あります。これらを取り外し、または締めつけるときの工具が悪いと、写真4-3(a)に示すようにセットのシャーシに円形のキズを付けてしまいます。

これを避けるために、ボックス・ドライバの先端をグラインダで削る加工をします(図4-1, 写真4-3(b))。

③ ポリウム用ボックス・レンチ

ポリウムやスイッチの取り外しは、その取り付け構造上、普通のスパナやモンキ・レンチは使用できません。写真4-4に示すボックス型レンチは、HOZAN社のW-27型ポリウム・ボックス・レンチ・セット3本組の一つで、このレンチがあるとパネルにキズをつけないで、確実に取り外し、取り付けができます。



(a) 工具が悪いとシャーシに写真のような円形のキズが付いてしまうので要注意！ (b) シャーシに傷をつけないように加工されたボックス・ドライバ

写真4-3 ボックス・ドライバの機能と加工



写真4-4 パネル表面から沈められたポリウムなどの取り外し、取り付けに重宝なボックス・レンチ